安倍外交の挑戦

川上高司

●2●

ロシアの地政学

「エネルギー」武器にアジアで優位展開
「プーチンしたたか戦略」に試される対応力

ソ連は冷戦で米国に敗北し、分裂した。プーチン大統領は、ロシアが選んだ最後の「切り札」である。そのプーチン氏が11日にキューバを訪問し、ラウル・カストロ国家評議会議長と会い旧交を温めた。

キューバは米国にとってはチョーク・ポイント（のど元のアキレス腱）である。ソ連がかつて、キューバに中距離弾道弾を持ち込み、米ソの核戦争寸前にまで緊張が高まった経緯がある（キューバ危機）。ウクライナ南部クリミア半島の強制統合について、欧米と手打ちをした直後だけに、プーチン氏のしたたかな戦略が見え隠れする。

そして、中国は5月20日、ロシアと天然ガスに関する大型契約を締結した。中露接近は「地政学の復活」となる。中露はユーラシア大陸の真ん中の「ハートランド」に位置する。この2つの大国が戦略的同盟を締結すれば、欧州もアジア諸国も周辺国（リムランド）になってしまう。

英国の地政学者であるハルフォード・マッキンダーは「ハートランド（ユーラシア大陸）を制するものは世界を制す」と断定する。

ロシアの主な収入源は石油や天然ガスの輸出で、輸出先は欧州である。欧州にはパイプラインで多くはウクライナを経由して供給する。従って、ウクライナが政情不安になれば欧州はガス輸入のリスクを負う。ロシアもガス収入が減少し、国家財政が厳しくなる。

そのため、欧州とロシアはウクライナを迂回（うかい）するパイプライン建設に力を入れてきた。

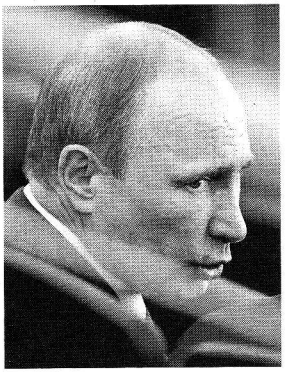
1つは、ロシア北部から北海を通りドイツ北部へと通じる「ノードン・ストリーム」だ。これによってドイツは安定的なガス輸入が可能となった。このため、ウクライナ問題で、ドイツは他のヨーロッパ諸国とは一線を画した。

もう1つは、黒海を横断してブルガリアからハンガリーなど東欧を経由してイタリア、オーストリアへと伸びる「サウス・ストリーム」で、建設が進む。

エネルギー地政学を淡々と実行するプーチン氏は、成長著しいアジア諸国へのガス輸出を狙い、シベリアに埋蔵する天然エネルギーを武器にする。ユーラシア大陸に「パイプライン」を縦横無尽に走らせ、地政学上の優位性を生かしたパワー・ゲームを展開する。

パイプラインのインフラ事業には労働力が必要である。そのためウラジオストクを経済特区として開放し、中国以外にもインドからの労働力を呼び込む。これはインドを中国とのバランスを取る戦術的均衡政策である。

プーチン氏は徹底したリアリストである。秋にも来日予定のプーチン氏とどう提携するのか、安倍晋三政権の地政学的な戦略的手腕が問われる。



プーチン露大統領は、地政学上の優位性を生かしたパワー・ゲームを展開している（ロイター）

かわかみ・たかし　1955年、熊本県生まれ。拓殖大学海外事情研究所所長。大阪大学博士（国際公共政策）。フレッチャースクール外交政策研究所研究員、世界平和研究所研究員、防衛庁防衛研究所主任研究官、北陸大学法学部教授などを経て現職。著書に、「米軍の前方展開と日米同盟」（同文舘出版）、「アメリカ世界を読む―歴史を作ったオバマ」（創成社）など。